

國學院大學学術情報リポジトリ

インタビュー 道標 岡野弘彦名誉教授(2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡野, 弘彦, Okano, Hirohiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000167

「インタビュー」道標 岡野弘彦名誉教授②

大正十三（1924）年生まれの岡野弘彦名誉教授は、九十一歳。歌人として今も第一線で活躍し、日ごろから言葉の乱れに警鐘を鳴らしている。（四月号からつづく）

――岡野名誉教授は、國學院雜誌に折口研究に関する論文のほか、古今集をはじめ歌に関する論文を複数書き残している。國學院大學の教員となつてからは、古事記・万葉集から源氏物語、今昔物語集、西鶴・近松まで幅広く授業を担当した。

岡野 昭和二十八年九月、折口先生が亡くなり、その翌年から『折口信夫全集』の編纂が学内で進められました。一番兄弟子あにでしの西角井正慶博士以下の方々が各巻の編集を担当されたのです

が、そのための資料蒐集や年譜の作製などの作業が大変で、先生の晩年に生活を共にした私が編纂室の主事の役をつとめ、若い研究者や学生の手を借りて必要な資料を集めました。没後一年を経た二十九年十月、中央公論社から毎月一卷を刊行して、全部で三十一巻の刊行を終つたのは、三十二年四月です。その一月前、刊行中の折口全集に対して、日本芸術院恩賜賞が贈られました。

全集が完成して後は、大学の講義に戻りましたが、折口先生の亡きのち私の講義科目などに配慮して下さったのは、予科時代から心を配つていて下さった佐藤謙三先生で、若いうちは教養課程の講義を担当して、広く各時代の日本文学作品に通じておくべきだ、と言われました。この点は折口先生も同じで、早くから自分の専門を狭く決めてしまふべきではない、とよく戒

められました。

だから二年くらいでテキストを変えて、上古の古事記・万葉から、中古の伊勢物語・源氏物語・古今・新古今、そしてうち
の大学は上古・中古を専門にする先生が多かったから、意識して
今昔物語や西鶴・近松・芭蕉の作品まで講義しました。

これはなかなか努力を要することで、講義の準備のために徹夜することも多かったが、折口全集の編纂で徹夜には馴れていました。それに私は酒も飲めず、煙草も早く止めてしまったので体力には自信がありました。

大学の体育祭に十年間、体育系の学生とマラソンを走り、五十代の終りまでサッカー・チームを持っていて、学生のチームや他校の教員チームと試合をしました。

四十代の中頃だったと思いますが、ドイツのボン大学と交換教授の話があつて、二年間日本学を講義してほしいということ
で、準備をしている時に、急に学生部の仕事を手伝うようにという佐藤謙三先生の指示で、千勝学生部長のそばでスポークスマンをつとめることになり、それから長く学生部長や文学部長の役職をつとめました。

一方で、全集を出版して後の『折口記念古代研究所』の行事も、講演会や紀要の出版、研究所での毎年の万葉旅行など、多

様な活動がありました。何より楽しく、実りの多かったのは、一年を通しての研究会に出席の良かった学生と共に、万葉集ゆかりの地を旅する『万葉旅行』で、年末の一週間かけて万葉集にゆかりの地を、できるだけ乗り物を使わないで歩きに歩いて、要所で私が話をする。

この旅中に感じたことは、学生各自が短歌の形にして手帖に記しておいて、旅行の最後の夜に歌会を開いて、批評しあう。一週間旅をして短歌に心を集中すると、学生達は意外なほど濃密な作品を作るようになるのです。

やがて私はその人たちを中心に、「人」という短歌会を作り、二十年間の結社活動をつづけることになりました。「人」短歌会は二十年で解散しましたが、そこから出発した幾つかの結社が、それぞれ特色を保って今も続いています。

万葉旅行は幾つかコースがあつて、大和の飛鳥から吉野へのコースが一つ、奈良周辺が一つ、近江一周が一つ、紀伊半島の東側を伊勢・志摩・熊野へかけてが一つ、紀伊半島の西側を御坊市あたりまで南下して東に折れ、昔の熊野詣での道を通って熊野本宮までが一つ。それに筑紫万葉と、越中万葉のコースを加えると万葉地理の主要部はほとんど歩いたことになる。年に二・三度は奥多摩へ一泊旅行して足ならしをしました。山岳部

の次は「折研^{せけん}」だと言われるほど、皆健脚だった。か弱く見える女性の方が持久力があって、四日五日と歩いていると肉刺^{まめ}がつぶれて運動靴に赤く血を滲ませながら、黙って歩いているのを見ると胸が熱くなることがありました。

最後には大学院生と百済の都、扶余をたずねて歩き廻ったのはよい思い出になっています。

――岡野名誉教授は、日ごろから敗戦後の文語の衰退に警鐘を鳴らし続けている。

岡野 今から考えて一番残念に思うことは、戦後あれほど日本人が自身の言葉を変えてしまったことですね。敗戦後七十年、こんなに日本人の言葉が大きく変わってしまうとは、あの当時の人は誰も気づいて居なかったと思います。

僕は二十年ほど前から、小説家の丸谷才一さん、詩人の大岡信^{まこと}さんと三人で、連句を巻いて二冊の連句集を出版しました。

この連句も最初の手ほどきを受けたのは折口先生からで、池田弥三郎さんや慶応の人と一緒に、先生の家で連句を巻いたのです。芭蕉がその門弟たちと巻いた代表的な作品は國學院の教室で学生に二年間ほど講義しました。

丸谷・大岡両氏と連句を巻きながら、折につけて話題となるのは、戦後の言葉の乱れと言葉の衰退です。丸谷才一という小説家は、戦後になっても自分の書く小説や文章の文体を、敗戦後の文体に変えなかった人です。それでも人々はその小説を、ほとんど違和感なく読んでいたはずです。

私も自分の短歌作品はすべて旧假名遣いで表記します。先にあげた、丸谷・大岡両氏と共に巻いた連句も旧假名遣いです。でも今書いているこの文章は新假名遣いです。そういう使い分けは、さほど気にならないで仕分けられ、また読み分けられる能力が日本人にはあるのだと思います。漢字によって初めて文字というものを知ったわれわれの祖先は、間もなくそこから平假名と片假名という二つの字体を案出し、漢字と共に三つの字体をたくみに使い分けて文章を表記してきました。文体と同じように、文字にも使い分けがあつてよいと思います。

私が日本人の日本語理解について気になっているのは、少し別のところにあります。私が四十代・五十代の頃、あちこちの中学・高校の国語の先生の研究会に、よく呼ばれたことがありました。理由は、教科書に出てくる短歌や俳句、つまり短い詩形の教材を教えるのがむづかしい、どう教えればいいかを知りたい、ということなのです。

たとえば芭蕉の句でも、次のような句はよく難解句として質問されました。

田一枚植て立去る柳かな

語られぬ湯殿にぬらす袂たもとかな

ゆく春を近江の人と惜しみける

いずれも芭蕉の代表句で、ちよつとその気になって調べれば釋き方はわかるはずで、それぞれの句の内包する深みも伝わると思うのですが、俳句の表現に親しみを持とうとする気持がまったく無い人々が、国語の先生の中にもふえてきているのだと思いました。もつとも三番目の句などは、芭蕉の弟子の中にもその眞意の汲み取れない近江の俳人が居て、芭蕉を悲しませているのですから、短詩型文学の受容にはむづかしい点があるのだと思います。

中世の秀歌が多い『新古今和歌集』で言えば、すぐれているのは西行・俊成・後鳥羽院で、定家は少し格が下がります。女流では俊成ノ女でしょう。

—最後に、短歌の将来について一言、いかがでしょうか。

岡野 折口先生が大正の末年に「歌の円寂する時」という題

で、短歌は滅びると予言した論を書き、三冊の詩集や新短歌形式の作品を発表しながら、それでも短歌への執着を死の間際まで燃やしつづけた様子を、私はまざまざと眼前に見ているのです。そして短歌はその後も現在まで、戦後日本の大きな変化を刻みながら生きつづけています。今後更にどういう変貌を経てゆくのか、予断を許さない状況にあります。

しかし、世がどうあろうとも、私は私で自分の身の内からにじみ出る苦渋の脂のしたたりのような思いを、わが歌の言の葉に託して歌いつづけるほかはないのです。

儀礼としての和歌は残るでしょう。しかし万葉集以来、脈々と続いてきた命の泉のような情熱は、この言葉の小さな器を今後も満たしつづけられるかどうか、私には断言する自信はありません。